

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 坂井 孝一

本論文は、建久4年(1193)5月に発生した曾我兄弟による敵討ち事件(以下、「曾我事件」とする)について、とくに同事件を題材とした文学作品『曾我物語』を歴史学の立場から積極的に活用し、その実像と鎌倉幕府政治史上における意義を明らかにしようとしたものである。

第一部「『曾我物語』と曾我事件」では、『曾我物語』を用いて既知の史料に再解釈を施し、「曾我事件」の歴史的意義を明らかにする。第一章では、『曾我物語』の文学作品としての特徴を指摘する。第二・第三章では、「曾我事件」の主要史料である『吾妻鏡』について、『曾我物語』と比較検討し、それが『曾我物語』をはじめとする複数の性格の異なるテキストを原資料としていたことを明らかにするとともに、『曾我物語』に収斂しない「曾我記」なる物語の存在を指摘する。第四章では、「曾我事件」に至る建久年間の鎌倉幕府政治状況の特徴を分析する。第五・第六章では、『吾妻鏡』の記事が『曾我物語』などを原資料とせざるを得なかったことに注目して、「曾我事件」の実像についての仮説を提示し、第四章の分析結果をふまえて、その鎌倉幕府政治史上の位置づけを明らかにする。

第二部「『曾我物語』の人物論」では、『吾妻鏡』と対比しつつ、『曾我物語』の叙述から、中世初期東国武家社会の特徴を導き出す。第一・第二章では、武士社会における所領相論と婚姻関係を考察して、さまざまなネットワークが張り巡らされていたことを明らかにし、第三章では、それが源頼朝の挙兵に与えた影響を指摘する。第四・第五章では、工藤祐経と曾我祐信の実像を『吾妻鏡』からさぐり、『曾我物語』における人物造形の背景を考察する。第六章では、武士の家の世代交代という観点から、『曾我物語』における曾我兄弟の元服や入寺の意味を明らかにする。

第三部「『曾我物語』の中世的展開」では、日本中世の文学作品としての『曾我物語』の特徴や、その発展について論じる。第一章では、『曾我物語』と西洋中世の英雄叙事詩『ニーベルングンの歌』などを対比して、日欧それぞれの文化的特質をさぐる。第二章では、『曾我物語』が能「曾我物」へ展開していく様相を論じる。

本論文は、『曾我物語』を活用することにより、歴史史料『吾妻鏡』の解釈を深め、「曾我事件」の政治史上の意義を明らかにすることに成功している。また「曾我記」の指摘などは、文学研究にとっても注目されることである。これらは、歴史・文学の双方に目配りし、考察を深めていった著者ならではの研究成果と評価される。「曾我事件」の史的意義や、『曾我物語』と『吾妻鏡』の関係などについて、なお検証・議論の余地を残してはいるが、本論文が歴史研究と文学研究とを架橋する独創的な成果であることの価値を損なうものではない。以上により、本審査委員会は、本論文を博士(文学)の学位を授与するにふさわしい業績と判断するものである。